

兼盛と忠見

天徳の御歌合のとき、兼盛、忠見、と

もに 御隨身にて、左右についてけり。

初恋といふ題を給はりて、忠見、名歌

詠み出したりと思ひて、兼盛もいかで

これほどの歌詠むべきとぞ思ひける。

天徳の御歌合のときに、兼盛と忠見は、ともに隨身として左方と右方についていました。

初恋という題材を頂いて、忠見は、名歌を詠むことができたと思ひ、兼盛もどうしてこれほどよき歌を詠むことができようか、いやできないと思つたのでした。

恋すてふわが名はまだき立ちにけり

人知れずこそ思ひそめしか

さて、すでに御前にて講じて、判ぜら

れけるに、兼盛が歌に、

つつめども色に出でにけりわが恋は

ものや思ふと人の問ふまで

恋をしているという私の評判が、早くも広がってしまいました。

人に知られないようにと想っていたのに。

さて、すでに天皇の御前で歌を読み上げて、判定なさっていたときに、兼盛の歌として
包み隠していたけれど、顔色に出してしまいました。私の恋心は、

物想いをしているのかと人が問うほどまでに

判者ども、名歌なりければ、判じわづ

らひて、天氣をうかがひけるに、帝、

忠見が歌をば、兩三度御詠ありけり。

兼盛が歌をば、多反御詠ありけるとき、

天氣左にありとて、兼盛勝ちにけり。

歌の優越を判定する人たちは、(どちらも)名歌でしたので優越をつけかねて、天皇のご意向を伺ったところ、帝は、(まず)忠見の歌を、二度三度お詠みになりました。(次に)兼盛の歌を、何回も繰り返しお詠みになられたときに、天皇のご意向は左方にあるということで、兼盛が勝ったのでした。

忠身、心憂くおぼえて、心ふさがりて、
不食の病つきてけり。頼みなきよし聞
きて、兼盛とぶらひければ、「別の病に
あらず。

忠身は、つらく思つて、ふさぎこんでしまい、食べられない病になってしまいました。病
気が重く回復の期待が見込まれない旨を聞いて、兼盛がお見舞いにいったところ、
「特別な病気というわけではありません。

御歌合のとき、名歌詠み出だしておぼ

え侍りしに、殿の『ものや思ふと人の

問ふまで』に、あはと思ひて、あさま

しくおぼえしより、胸ふさがりて、か

く重り侍りぬ。」と、つひにみまかりに

けり。

御歌合のときに、名歌を詠み出せたと思われましたが、あなたの、『物思いをしているのかと人が問うほどまでに』という歌に、ああと思って、驚いたと思ったときから、胸がふさがって、このように重病になったのです。」と言って、ついには亡くなりました。

執心こそよしなけれども、道を執する

ならひ、あはれにこそ。ともに名歌に

て拾遺に入りて侍るにや。

物事に深くとらわれる心はよくないですが、(歌の)道を深く心にかける習慣は、心が動かされるものです。どちらの歌も名歌でしたので、拾遺集に収められているのでしょうか。